HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナショナルな欲望の回帰 ： １９９０～２０００年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	松下, 隆志
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12042号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60490
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takashi_Matsushita_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：　松　下　隆　志

審査委員　主査　特任教授　望　月　哲　男
　　副査　准教授　　大　西　郁　夫
　　副査　准教授　　越　野　　剛

学位論文題名
ナショナルな欲望の回帰：1990～2000 年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容

1990 年代以降のロシア文学は、91 年のソ連崩壊を契機としたロシア社会のアイデンティティ・クライシスの解釈とそれへの対応を、大きなテーマとして抱えてきた。後期社会主義の世界観を背景とした特異なロシア・ポストモダニズムという文化潮流も、そうした危機意識と密接に関係した現象であり、その思潮の特徴・機能・可能性・限界の分析は、現代ロシア文芸の理解にとってきわめて本質的な意味を持つ。

その分析作業は、無論ロシアや欧米の学界・言論界で進行中であるが、「ロシア・ポストモダニズム」の定義や枠組みの解釈自体、研究者間に大きなぶれがあり、共通の理解を積み上げるのが困難な状況になっている。結果的にこの現象の研究は、しばしば 90 年代ロシア文芸論一般と同義に扱われ、この文化潮流自体の淵源から次の時代への影響にまで広く目を配った研究はほとんど存在しない。また現代文学研究の一般的傾向として、検討対象となるジャンル、作家、作品の選択にもしばしば偏りが見られ、特に本国ロシアの研究においては、研究者自身の世界観的立場が研究の客観性を脅かすなどの限界も見られる。

本論は、後期ソ連から 2000 年代までの半世紀ほどの期間を視野に入れてロシア・ポストモダニズムを論じている点、1931 年生まれのマムレーエフから 1980 年生まれの S・シャルグノフまで広い世代の作家を取り上げ、映像ジャンルも含む多様な領域にわたる文芸作品を取り上げている点、ジャン＝フランソワ・リオタール、イーハブ・ハッサン、フレドリック・ジェイムソンなどによる欧米ポストモダニズムの定義を参照しながら、「脱構築」概念の解釈やモダニズムとの関係論などにおけるロシア・ポストモダニズムの特徴を丹念に析出している点、「消極的自由」、「ネガティヴ・アイデンティティ」、「欲望の三角形」、「近代の超克」といった 20 世紀文化論の諸概念を用いて、ポストモダニズムをより広いコンテクストで論じている点で、きわめて意欲的であり、かつ独創性に富んでいる。

結果として論者は、90 年代ロシアにおける西欧的ポストモダニズムへの「擬態」の背後に、「欲望の模倣」というべき心理構造を見いだし、また 90 年代末にかけての文学作品における「空虚」「自由」「アイロニー」といった概念の変容のうちに、そうした「擬態」の破綻を読み取るという、発見的な解釈に成功している。さらには 2000 年代の文芸における「ロシア回帰」「ソ連回帰」のテーマを、ポストモダニズムの問題意識の継承と乗り越え（抑圧された欲望の回帰）の表象と捉えているが、これもまた文学現象を連続性の相で捉える議論として意味深い。最終的に論者は、90 年代以降の文芸思潮の流れを、ポストモダニズムへの「擬態」による文化的アイデンティティ危機の克服というポジティヴな側面と、西欧文化の「陰画」としてしか自国文化を語ることができないロシア的体質の露呈というネガティヴな側面から描出した上で、現代文芸の課題を後者の「ロシアの牢獄」の超克という点に見ているが、こうした広い視野に立った分析の結果、ポストモダニズムを芯に据えながら世紀の枠を越えて現代文学の流れを把握する概念的枠組みが提示されたことが、本論の最大の貢献と評価することができる。

もちろん現代文芸の広範な事象を扱った本論文には、十分論が尽くされていない部分もある。後

期ソ連の特殊ポストモダニズム的文化状況と、90 年代のロシア・ポストモダニズム言説との間にある一義的でない関係は、必ずしも明快に説明されていない。また空虚、自由、アイロニーなどの鍵概念をめぐる表象の変化はそれぞれ説得的に解明されている一方、そうした概念間の相互関係、あるいは他のパラレルな諸概念との関係については、若干曖昧なところも残されている。ロシア・ポストモダニズムの「欲望」論による読み替えにおいて、全体の理論的枠組みは的確に構築されているが、一部で比喩的説明にとどまる箇所も見られ、より分析的な記述が望まれる。ただし、以上のような諸点は、本論の問題設定の大きさ、射程の長さ自体に起因する若干の瑕疵であり、本論の価値を損なうものではない。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究の成果を高く評価し、全員一致で本論文を博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。